



TITLE:

心理研究部門(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

室伏, 靖子; 浅野, 俊夫; 小嶋, 祥三; 松澤, 哲郎

CITATION:

室伏, 靖子 ...[et al]. 心理研究部門(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報
1979, 8: 11-12

ISSUE DATE:

1979-01-13

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162835>

RIGHT:

in awake monkeys.

Matsunami, K., and Hamada, I. Pyramidal micro-connections and motor control. p. 36, (1977)

- 5) Motor cortex unit activity related to ipsilateral upper limb movement of awake monkeys.
Matsunami, K., and Hamada, I. XXVII Internat. Cong. Physiol. Sci. (1977)
- 6) 前頭葉、側頭葉のニューロン活動と短期記憶を含む視覚弁別学習

久保田 競

第6回日本脳波・筋電図学会
脳波と筋電図, 5, 8 (1977)

- 7) 視覚性トラッキングと錐体路細胞の活動
浜田生馬, 久保田 競
第54回日本生理学会大会
日本生理学雑誌, 39, 347 (1977)
- 8) 随意運動に先行して起るサル運動野ニューロンのシナプス電位について

松村道一, 久保田競

第54回日本生理学会大会
日本生理学雑誌, 39, 347 (1977)

- 9) 微小な誤差補正運動と運動野ニューロン活動
浜田生馬, 久保田競
第24回生理学中部談話会
日本生理学雑誌, 40, 97, (1978)
- 10) 視覚性の短期記憶を含むタスクにおけるテコ押し運動に先行する前頭前野ニューロンの活動について
久保田競, 三上章允
第7回日本脳波・筋電図学会
脳波と筋電図, 6, 21, (1973) 1978
- 11) NMU および運動野ユニット等でみられる可塑性, あるいは学習について

松波 謙一

脳波と筋電図, Vol. 6, p. 5, (1978)

- 12) 視覚性追跡制御運動中の誤差補正時の錐体路細胞活動

松波謙一, 船橋新太郎, 久保田競

第55回日本生理学会大会予稿集, P112 (1978)

心理研究部門

室伏靖子・浅野俊夫
小嶋祥三・松澤哲郎

研究概要

- 1) 大脳半球機能の非対称性について

室 伏 靖 子

切断脳のアカゲザルを用いて、条件性継時弁別および見本あわせ課題で、左右半球が競合する手がかりを与えられた場面における反応決定から、両半球の行動統制に非対称性が認められるか否かが検討された。

- 2) ニホンザルにおける認知の発達

室伏靖子・小嶋祥三・松澤哲郎

出生直後から生後2年までのニホンザル乳幼児の知覚・認知の発達と身体・運動的発達について縦断的研究が進められている。

- 3) チンパンジーの言語の獲得

室伏靖子・浅野俊夫・松澤哲郎

言語学、情報工学、神経生理学の分野と共同して、実験的行動分析の立場からチンパンジーの人工言語の獲得に関する研究がはじめられた。

- 4) 霊長類の選択行動における時間要因の検討

浅 野 俊 夫

- 5) 霊長類のコミュニケーションに関する比較行動学的・神経学的研究¹⁾

小 嶋 祥 三

- 6) ニホンザルの視知覚に関する心理物理学的研究

松 澤 哲 郎

総 説

- 1) 浅野俊夫(1978): 個体行動とヒト化—行動分析の立場から—。科学, 48, 213-220.

論 文

- 1) Ito, M. and Asano, T. (1977): Temporal discrimination in Japanese monkeys. *Jap. Psychol. Res.*, 19, 39-47.
- 2) Matsuzawa, T. (1977): EEG, lever-pressing, and drinking behavior under cortical spreading depression in rats: preliminary experiments for behavioral application of SD. *Brief reports from the laboratory of psychology Kyoto University*, 3.
- 3) Matsuzawa, T. (1977): Interhemispheric synthesis of antagonistic experiences in rats. *Brief reports from the laboratory of psychology Kyoto University*, 4.
- 4) 松澤哲郎 (1977) 短時間提示されたランドルト環の知覚における両眼加重。心理学研究, 48, 112-116.

学 会 発 表

- 1) アカゲザルの遅延反応の行動分析

小 嶋 祥 三

日本心理学会第41回大会 (1977)

- 2) アカゲザルの遅延反応における observing response

1) 米国 National Institute of Health において研究

について

小 嶋 祥 三

日本動物心理学会第37回大会 (1977)

3) サルの大脳半球の優位性に関する予備的実験

室 伏 靖 子

日本動物心理学会第37回大会 (1977)

4) Spreading Depression を用いたラットの摂水行動

松 澤 哲 郎

日本動物心理学会第37回大会 (1977)

5) 行動と認知—行動主義の立場から—

浅 野 俊 夫

異常行動研究会シンポジウム (1977)

6) ハトにおける選択行動

浅 野 俊 夫

日本動物心理学会例会 (1977)

社会研究部門

川村俊蔵・河合雅雄

東 滋・鈴木 晃

森 梅代¹⁾・足澤貞成²⁾

研究概要

1) ニホンザルの分布とその変動に関する研究

川村俊蔵・東 滋

鈴木 晃・足澤貞成

京都、兵庫、滋賀、和歌山、三重、岐阜、富山、宮崎、東北地方の南部のニホンザルの分布の現状について、一次資料の集積をおこなっている。

2) ニホンザルの社会生態学、とくに自然群の環境利用とグルーピング・社会構造

東 滋・足澤貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れがしめす生活と社会現象をとらえなおすために屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行なっている。

3) ニホンザルの個体群の生活の維持に対する森林施業その他の human impact の影響の生態学的研究

東 滋

ニホンザル個体群の地域構造や生活のたてかたに与える人為営力の作用を生態学の文脈においてとらえる。もっぱら“自然”の側の反応を、異なる形式あるいは程度で人為の加わった地域間の比較と同一地域の時系列的変化の追跡により把握しようとする。下北半島の北西部・南西部の2つの地域個体群についての個体群変動の追跡と岐阜県下の天然林地域と“森林開発”のすすんだ地域

の予備的調査を行なった。

また平行して、おなじ環境変化がニホンザル以外の森林哺乳動物に与える影響についても調査をすすめている。

4) ニホンザルの地域個体群のあり方

鈴木 晃

上信越地方を中心として、ニホンザルの地域個体群の土地利用、個体群動態、遊動におけるスペーシングの問題、オスの群れの離脱等に関する社会関係等の調査およびとりまとめを行なってきた。

5) ニホンザルコドモの社会関係の発達

森 梅 代

あそび仲間関係、社会関係の発達における性差および性的成熟と遊び行動の関連、母子関係に関する研究を行なっている。

6) 東アフリカにおける各種霊長類の社会学・生態学的研究

鈴木 晃

特別事業による海外調査を 1977年8月から一年間、ザイール、ケニヤを中心に行なっている。

7) インドネシアにおけるヤセザル類の比較社会学的研究

川村俊蔵・渡辺邦夫¹⁾

昭和49年度に始まるインドネシアにおけるヤセザル類の比較社会学的研究は、この年(第3次)を以って一応の終止符を打った。川村は前年に引きつづき、スマトラの主としてサンピル山調査区において、*Presbytis melalophos* の研究を行ない、群れが典型的な単雄群であり、オスグループが存在し、これまでにもっともよく研究された *P. entellus* と基本的に同型であるが、細部に相違があり、行動上かなり進歩した種であることを確かめた。メンタウエイ産の種を担当する渡辺は49年来の主研究対象である *Simias concolor* について、ペア型と考えられた従来の考えを打ち破って、より本来的な条件下では、この原始的な種もやはり単雄群型であることをつきとめた。同時に観察した *P. potenziani* については、ペア型がどの地域でも一般的であるという結果をえた日本側と共同研究を行なうインドネシア側の2人の研究者も、ジャワにおいて、それぞれ *P. cristatus*, *P. aygula* を観察し、その結果も基本的に単雄群型を認めざるをえないものであった。

8) ヒヒ類の比較社会学的研究

河 合 雅 雄

ゲラダヒヒ、マントヒヒ、マンドリル、サバンナヒヒについて、生態と社会構造の関連についての比較考察を行なった。

9) ゲラダヒヒの生物社会学的研究

森 梅 代

1) 教務職員 2) 教務補佐員

1) 大学院学生